書評

小西賢吾 著『四川チベットの宗教と地域社会——宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』

（風響社、二〇一五年）

長野泰彦

本書は「宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究」という副題のついた、チベットに広く行われるポン教とその信徒集団に関するモノグラフで、著者が京都大学に提出した学位論文の改訂版である。ポン教と聞いて、どこのいかなる宗教かを直ちに理解する日本人はいまだ少数と思われるが、それはチベットに仏教が将来される以前から存在していた宗教で、チベットにとって基幹的な精神文化である。仏教との対比において、しばしば日本の神道に当たるとの解説が宗教学の概説や百科事典に散見されるが、その喩えは適切でない。むしろ修験道に当たるというのが評者の私見である。その理由は後述するが、チベットの精神文化を貫くポン教とその信徒集団にかかわるフィールドワークに基づく論考が、我が国の研究者によって書かれたことは画期的であり、その上梓を一チベット学徒として素直に喜びたい。

なお、混乱を避けるため、評者の使う「ポン教」と著者の言う「ボン教」という呼称について説明しておく。この宗教はチベット語正書法（綴字）で bon と書かれ、そのローマ字表記は bon である。このため、ローマ字読みである「ボン」を使うことが岩井大慧以来行われてきたようであるが、現代チベット語では方言の如何にかかわらず、発音は［$p^{h}on^{24}$］（p の出気音＋前舌円唇半狭母音＋n で、低昇型の声調）である。正書法 bon の前に一定の前接字がつかないかぎり、b- が［b-］という有声音で現れることはないことから、現在ではポンと表記するのが一般的である。

ポン教はチベット自治区全域、四川省、甘粛省、青海省、雲南省、ヒマラヤ南麓に広く分布している宗教で、仏教がチベットに齎され、政権と結びつく前まではその地域にドミナントであった。土着的要素と密接な関連を保ちながら、独自の高度な教理体系を築きあげ、少数派ながら今も宗教集団として生き続けている。もともとポン教は西チベットのシャンシュン国（漢籍では女國）で行われていた葬送儀礼の総称であり、ポン「教」として組織化されたも

のではなかった。シャンシュン国は中央チベットに興った新興勢力（後の吐蕃王国）との間で母方交叉イトコ婚を行う関係を保っていたが、新興勢力が国家統一の新イデオロギーとして仏教を採用するに及んで、シャンシュン国の政治勢力と宗教は中央チベットから駆逐された。現在でもポン教寺院や信徒集団が四川省西部などの中央チベットから見た周辺地域に集中しているのはこのためである。

しかし、九世紀後半から起こった仏教復興運動と軌を一にして、ポン教もまた新たな形で再編成され、教理も仏教を強く意識して再構築された。「人々を悟りに導く」ゴールは仏教と同じだが、そこにいたるルートと手法は仏教とは正反対である。ということは、仏教の教義と論理を深く理解した上で逆の論理体系を作り上げたわけで、この理解力と執拗さには驚嘆するほかない。また、土着的要素をも積極的に併呑するなど、論理構築の過程で覗われる柔軟さも特筆すべきもので、私が「ポン教は修験道に喩えられる」と言ったのはこの態度を指している。ポン教研究の先駆者の一人、David Snellgrove（もとロンドン大学SOAS教授）も次のように述べている。

"We are thus concerned not only with pre-Buddhist Tibetan religion, but with Tibetan religion regarded as one single cultural complex .... Regarded in this way, Bon might indeed claim to be the true religion of Tibet. Accepting everything, refusing nothing through the centuries, it is the one all-embracing form of Tibetan religion"（*The Nine Ways of Bon*, p. 13）.

このように、ポン教はさまざまの面で、チベットの基層文化を代表する宗教であり、その地域を理解するうえで不可欠の要素と言える。また、このような新たなポン教の組織化の中心となったのが四川省西部のギャロンと本書が扱う地域にかけてであったことも興味深い。

では、ポン教は従前どのように研究されてきたのだろうか？　チベットと言えば仏教であり、文献や図像資料の豊富さは圧倒的である。また、仏教は八世紀以来長くポン教を弾圧してきたし、「ポン」に「怪しげな」「いかがわしい」というイメージを付与し続けてきたから、人々の関心がポン教に向かわなかったのは当然である。我が国のチベット学も仏教研究から始まり、それを軸に展開してきたから、ポン教研究は皆無に近かった。寺本婉雅（もと大谷大学教授）がポン教経典「十萬白龍」を一九〇六年に翻訳・発表しているのは例外に属する。この傾向は世界的にも同様で、Hoffmann, *Quellen zur Geschichte der tibetischen Bon-*

Religion (1950) と Nebesky, Wojkowitz, *Oracles and Demons of Tibet* (1956) を除けば、研究はほとんどなかった。この状況を劇的に変えたのが上述の Snellgrove で、一九五九年のチベット動乱でチベットを逃れたポン教学僧三名をロンドン大学に招聘し、共同研究を行った。これをきっかけとして、ポン教のチベット文化における位置づけが見直され、ポン教文献を用いた種々の分野での研究が急速に進展した。評者が主宰した国立民族学博物館におけるポン教研究プロジェクトもこの第二段階の典型と言えるが、文献研究と現地調査双方の手法により、基本的に仏教との対比においてポン教の歴史、論理ないし教理、そこから派生する図像や儀礼を解明することを主目的とする。この研究傾向は現在も進行中であるし、今後も推進されるべきものだが、一九九〇年代以降中国内での調査研究がある程度可能になったことにより、第三段階として現地調査に基づくポン教と地域社会の構造や宗教実践にかかる研究が散見されるようになった。この場合、研究者は必ずしもポン教自体の解明に主たる関心があるのではなく、宗教（実践）と社会との一般的関連に力点を置いている。したがって、本書をポン教研究の第三段階と位置づけて書評することは、ひょっとすると著者の本意に沿わないのかもしれない。しかし、このような一般性の高い研究は第二段階的研究の狭さを是正し、より高い普遍性を指し示してくれる点でポン教そのものの理解に不可欠である。このことと現地での文化人類学的調査の困難を乗り越えたことの二重の意味で本書が持つ価値は高い。

本書は、Ⅰシャルコクと「宗教」のかたち、Ⅱ改革開放以降のボン教僧院、Ⅲ再編される地域社会と宗教の役割、の三部構成になっている。第Ⅰ部では、調査対象となる地域、村落、寺院、人々の生業などの変遷を概観した上、ポン教の概略とその地域的特性、地域社会共同体の核としての寺院の位置づけが語られる。第Ⅱ部では、寺院の建造物を含む活動基盤がいかに再構築されたか、次いで僧侶の組織と寺院における教育の仕組みが、寺院の持つ共同性との関連において論じられる。第Ⅲ部では、宗教実践を世俗の人々の立場から見据え、とくに経済発展や地域再編と宗教との連関をいくつかの事例をもとに記述する。

第Ⅰ部では、まず調査地の人々とその歴史、および、そこでのポン教の輪郭が手際よくまとめられているが、なかでも我が国におけるチベット理解の上で重要で、且つ、我々が見落としがちな点として、①民族誌的チベットと政治的チベットの区別、ならびにチベット人による伝統的地

域区分と中国行政区画のずれ、②調査地における生業と経済の変遷、③仏教側からの解釈としてポン教は三つの発展段階を経て現在のユンドゥン・ポンに至ったとされるが、現状においてもなお、それとは無関係のローカルな信仰（土地神や聖山など）が密接に関連していること、を指摘している。①と②は彼らのアイデンティティーの在処にかかわる問題だが、事柄によってアイデンティティーがずれていることが珍しくない。たとえば言語について、私は著者に強い学問的動機を与えたSamten G. Karmay氏の言葉を彼が東洋文庫に招聘された一九七四年に調べたことがある。本人はアムド方言だというが、語彙形式や語頭がresonantである音節に声調発生が認められることなど、明らかにカム方言の特徴を示す。著者はこれらの問題点を軸に調査地域でのポン教実践を記述してゆく。

第Ⅱ部では、寺院の建造物を含む活動基盤が改革開放以降いかに再構築されたかに関し、S僧院における具体的な歴史が或る僧侶のライフヒストリーを軸に展開する。次いで僧院の組織とそこでの現代的教育の仕組みが、僧として生きることの意味と寺院の持つ共同性との関連において論じられる。とくに二月に行われる、共同性を強く前面に押し出したマティ・ドチェン儀礼の記述はこの地域での宗教と村落の連携を映すものとして有益である。また、二〇〇九年についてのみではあるが、寺院での儀礼を通年で観察している点は評価されよう。

第Ⅲ部では、①僧院を中心としているが、担い手は俗人である「ゴンジョ」というゾクチェン（大究竟）に繋がる儀礼・修行、②チョルテン（供養塔）建設が持つ多重的意味の記述と考察が示されたうえ、結論としての終章へ入る。評者は②に関しては十分理解していないのでコメントは控えるが、①の「ゴンジョ」がこれほどの規模で再興された例はなく、ポン教と信徒集団のあり方を考える上で貴重な報告になっている。

第Ⅱ部、第Ⅲ部を通じて言えることだが、アク・プンツォという良質なインフォーマントの協力があったにせよ、寺院の内部にかかわる事柄、とくに布施を含む経済的・経営的な数字や（人口を含む）統計などをここまで具体的に明るみに出した業績はない。評者も*A Survey of Bonpo Monasteries and Temples in Tibet and the Himalaya*（2003）を編纂したときデータを集めるのに最も苦労したのはこの点であった。

以上述べてきたとおり、本書は世界的に見てもチベット理解の弱点であったポン教とその信徒集団の生きている姿

を的確に記述した、優れた民族誌であり、チベット学にとっても、文化人類学にとっても、地域研究にとっても、確実に「次に繋がる」研究である。今後ともこの種の研究が著者をはじめ若い世代によって牽引されることを期待する。

◉著者紹介◉

①**氏名**……長野泰彦(ながの・やすひこ)。

②**所属・職名**……国立民族学博物館名誉教授。

③**生年・出身地**……一九四六年、埼玉県。

④**専門分野・地域**……チベット・ビルマ歴史言語学、ギャロン語の記述研究。

⑤**学歴**……東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業(一九六九年)、東京大学大学院人文科学研究科(宗教学宗教史学専攻)修士課程修了(一九七一年)、同博士課程中退(一九七四年)、カリフォルニア大学言語学部大学院修了(一九八〇年)、PhD取得(一九八三年)。

⑥**職歴**……東洋文庫研究員(一九七五〜七七年)、カリフォルニア大学東洋語学部講師(チベット語)(一九七八〜八〇年)、国立民族学博物館助手・助教授・教授(一九八〇〜二〇一一年)人間文化研究機構理事(二〇〇五〜〇八年)、総合研究大学院大学理事(二〇一一〜一四年)。

⑦**現地滞在経験**……毎年五カ月間インド南部のチベット人難民コロニーでチベット語方言調査(一九七二〜七四年)、ネパール北部でチベット語方言調査(一九八〇〜八一年)、国立民族学博物館任官以来、毎年数カ月チベット語とギャロン語の調査。

⑧**研究手法**……基本的にインフォーマントについてフィールド調査と文献調査を併行させる。

⑨**所属学会**……日本言語学会、日本西蔵(チベット)学会(二〇一三〜一六年度会長)。

⑩**推薦図書**……R・Aスタン『チベットの文化』(山口瑞鳳・定方晟訳、岩波書店、一九九三年)。D・スネルグローヴ&H・リチャードソン『チベット文化史』(奥山直司訳、春秋社、二〇〇三年)。長野泰彦・立川武蔵『チベットの言語と文化』(冬樹社、一九八七年)。